

1 健康課題の視点でSDGs 解決策を考える

岩手県立大学看護学部 准教授 アンガホッフア司寿子、教授 細川舞

該当する
原則

原則 9：持続可能性を推進する（目標 1、4、6、12、13）

1. 活動の背景

看護学部3年次の選択科目である国際文化看護論演習では、学習目標に「国際的な視野で保健・看護上の課題を捉え、議論することができる」「自然環境・地球環境問題と人間の健康の関係について考えることができる」を掲げている。本科目の授業での取組の1つに、「SDGs解決策を考える」と題してグループワークとプレゼンテーション、およびディスカッションを行っている。履修学生は、持続可能な開発目標ファクトシート（国連広報センター、2015）を参考に、グループごとにSDGs17の目標から関心を持った1つを選び、健康課題と関連した課題に着目し、国レベル、地域レベル、そして看護学を学ぶ大学生としての個人レベルで、解決策を考え発表している。発表後には質疑応答の意見交換により、さらに学びや考察を深めている。

この活動を通して、学生が国際的な視野で、医療保健や看護上の課題を考える機会を持ち、さらには看護学の領域を超え、学際的・政策的な視点で活躍する看護職を目指す意識が養われている。



ディスカッションの様子

2. 選んだ目標と解決策の考察

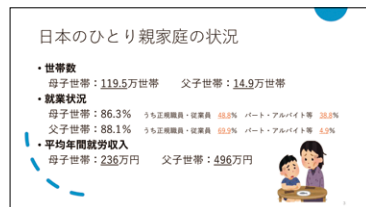
活動期間は令和6年5月～6月、履修生28名で5つのグループを作成した。講義時間内外で複数回のグループワークを行った。調べる内容やスライド作成を分担し、メンバー全員が参画して取り組んだ。発表では、その目標を選んだ理由と現状、グループで考えた解決策について、各グループ約10分のプレゼンテーションを行った。

(1) 目標 1 貧困をなくそう

日本とアメリカのひとり親家庭の貧困に焦点を当てた

内容を発表した。特に日本では、父子家庭に比べて母子家庭が10倍に近い状況だが、母子家庭の親の非正規就業率が高いことが背景で世帯収入に大きな差があることを示した。さらに貧困に伴う健康課題として、栄養が十分な食事の不足や、医療へのアクセスの壁などの説明を行った。

解決策としては、アメリカの食料支援プログラムの検討、ボランティアによる食事の提供などが提案された。また医療職として、当事者からは発信しづらい貧困の背景について、患者に寄り添って把握すること、貧困以外の問題を抱えている可能性を理解することが挙げられた。

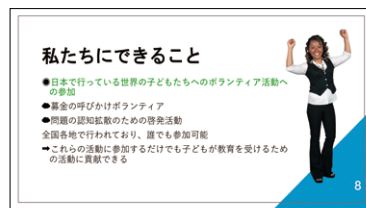


日本のひとり親家庭の現状を示した

(2) 目標 4 質の高い教育をみんなに

教育により健康に関する知識を得ることで、疾病の予防や早期治療につながると考え目標を選択した。世界に目を向けると、子ども・若者の6人に1人が学校に通っていない状況がある。その背景に教育者や経済的余裕の不足、家族や病院によるもの、戦争・紛争が挙げられた。

自分たちにもできることとして、少額からできるユニセフ等支援団体への寄付、国内での啓発活動やボランティア活動への参加が提案された。また医療者として途上国の衛生面に関する教育の現状など理解することで、その知識が将来的に支援活動にもつながると考えた。



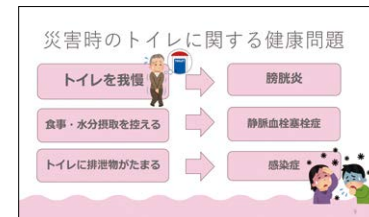
ボランティア活動への参加が提案された

(3) 目標 6 安全な水とトイレを世界中に

災害時の水の必要性に着目したプレゼンテーションを行った。水が、感染症を予防するための衛生環境を整える、脱水症状や血流の悪化を防ぐ、といった健康への関

連について説明した。その上で、災害時に必要な水の量や、日常生活での心がけて節水される量について、具体的な数値で示し、自分事として考えさせるスライドが工夫された。

さらに災害時のトイレが整備されていないことによる、排泄を我慢する、水分を控える、衛生環境悪化により、膀胱炎、血栓塞栓症、感染症などの健康問題を示した。解決策として、普段からの節水習慣、災害時に使用できるトイレの整備などの備えを提案した。



災害時のトイレと関連する健康問題

(4) 目標12 つくる責任つかう責任安全

エネルギーと食料の2つについて、大量生産・大量消費が自分たちの生活や健康問題にどのように影響しているかに関心を持ち目標を選択した。

エネルギーについては、スマート家電の活用により、余剰電力使用量の削減とともに活動や食事などスコア化による健康状態の把握が予防的医学の観点で効果があるのではと指摘した。また食料については、自分が食べられる量の注文、食べきれなかった料理の持ち帰りが資源の点でも肥満予防の点でも有効ではないかという考えが共有された。



大量生産と大量消費に着目した

(5) 目標13 気候変動に具体的な対策を

近年の気候変動で、暑さや寒さの気温差の激しさを実感しており、それによる健康への影響を結び付けて考えるためこの目標を選んだ。地球温暖化の問題については、世界共通の目標として、平均気温上昇を産業革命前(1880年)に比べて2°C以下に抑える、とされている。

解決策として、緩和策と適応策に分けて説明した。緩和策としては、節電、徒歩や自転車での移動、野菜を多く摂る、廃棄食品の削減、リサイクルが挙げられた。適応策は、こまめな水分補給や日傘・帽子による熱中症予防、家族で緊急時の連絡を決める、ハザードマップの確認といった災害時の避難対策を示した。



適応策としての熱中症予防、災害時の避難対策

3. 履修生の学びの振り返り

発表とディスカッションを終えて、学生からは以下のような振り返りがあった。

- ・ 解決策を自分事として受け止められるよう、より具体的な情報を伝える必要があると感じた。
- ・ 学生としてだけでは無く、医療者の視点で貧困を捉え、精神的な支援を行う可能性を見出し議論できたことは有意義だった。
- ・ 世界の現状を新しく知ることができた。自分達ができる具体的なことについて学んだため、実践してみようと思った。
- ・ 学生である自分たちには難しいことであると感じていたが、知識を身に付けて将来への支援に繋げるなど、できることはたくさんあるのだと気づくことが出来た。
- ・ 視点を変えると見えてくる問題もその解決方法も様々だと思うので、自分でももう少しこのテーマについて考えてみたいと思う。

4. 今後の学習の展望

履修学生は、短い活動期間のなかでも、SDGsを健康課題の視点で捉える経験を通し、新たな気づきとともに、いま学生としてできること、将来医療者としてできることについて、考える学習経験ができていた。

解決策のなかには、医療職を超えて、学際的な取り組みが求められるものが多い。今後は、学部や専門領域を超えたディスカッションの機会があれば、さらに多角的な考察をしたり、解決策の実現に向けた行動につながったりすると考える。



プレゼンテーションの様子